

平成十六年七月一日発行 第十四巻第七号 通巻第一五七号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

岡井省二創刊

平成16年7月号



隣の宇宙

高橋将夫

いま吸ひし花の匂ひを吐きにけり
風よ風上がれ上がれと引きにけり
春日傘ためらひがちに回りたる
とめられぬ柳絮の行方なりしかな

花の山ぐるり人間ばかりかな
春の水星の渦より汲んできし
白南風に乗り呼び出しのアナウンス
新真綿母の肩より離れざる
涼風や超新星の爆発す
でで虫や光背といふ重きもの
夏の夜の夢は隣の宇宙へと

黒　　竹

石脇みはる

遠くまで来てしまひけり幣辛夷
死ぬること恐おそておぞと明易し
金色のえびね蘭なり西の峯
山茱萸や耳さとくゐて鳥のこゑ
花蘇枋佛具磨いてをりにけり
わがままを通し通され暮の春
青空に梨の花摘む夫婦かな
運のよき青虫なりき花キャベツ
山法師抹茶一服いただきて
藤の花大樹を抱きのぼりたる

特別作品

水門は開いてをりし柿の花
ルピナスの空に綿雲二つあり
黒竹の筍不意をつかれをり
洗ひ米旅に干しをり御忌の鐘
葎いでし葎の浮巢を引き寄せて
五月雨の蔵王の釜の見えざりし
六月の利尻の山の都合目
次へ次へ風つたはりし槐かな
宿坊を訪ねてゐたり杜若
著莪の花綾取りをする二人かな

槐安集

市場基巳

鴨が身を浸して春を近しめし
恋刹那春ゆふやけの小綬鶏は
おもかげの永久に横向き白木蓮
草焼ける香りかそけく悲しみもち
午ひととき老人ホーム蛇寄せず

水野恒彦

佛心の淡海や蝌蚪の生まれぬて
草臚鹿の流れの中に立ち
うすやみのどこかに目あり櫻の夜
春愁や大き孔雀の飼はれぬる
水飲んで腑に落したる春の闇

石脇みはる

樫の雄花に触れしからだかな
牛蛙水郷往き来してゐたる
鉄パイプ組立ててをり杜若
出迎へはあまたの赤のチューリップ
三月の羽のかたちの霧氷なり

竹内悦子

知らぬ家に蘇枋咲きたる扉かな
花虻やときどき油断してをりぬ
金星と向きあふ月の臚かな
潮干潟母と子の距離ありにけり
換気孔に雀来てをる立夏かな



木下野生

本坊に大きな魚花の昼
春の暮長き梯子を横にして
蝌蚪の水大きな石がかたはらに
つばくらめ渡船が音をたてながら
陽炎やいくさに人を送りぬて

中島陽華

蓋置きはさざえの殻よ花三分
蜜蜂の紛れてゐたる仮寝かな
暮の春一番線の鳥打帽
点心や花散る里の奥座敷
幼な鼻かみ愛宕の苔の花

延広禎一

岡井節子先生花の会御出演「八島官女」
宙拂ふ薙刀官女梨の花
胎蔵や飛龍頭の具に春子ある
天つ日の蜷群れ壽限無じゆげむかな
鯛網や海に向きたる遊女墓
筍の茹汁滾ぎるカオスかな

栗栖恵通子

パレットに白がぬらりと夏に入る
万緑や膝曲げてをる胎の中
黒牛を冷やしてゐたり四土めぐり
冷飯のほとび八十八夜かな
隠り沼の一本杭のカンカン帽

加藤みき

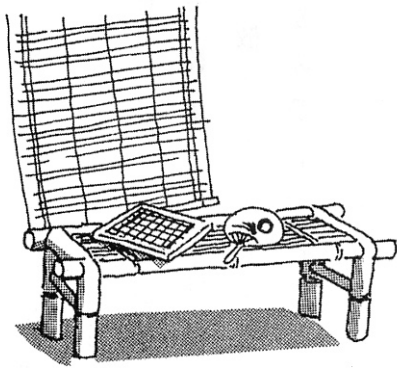
しばらくは音なしでをり青葉木菟
松蟬や土中もじやもじやしてゐたる
花過ぎの樹下藤たけてゐたりける
沖膾昨日のことを忘じたる
海坂へ茅花流しの吹き出づる

大島翠木

朝櫻前も後も人あらず
ひたひたの花のいづこに放下せん
花の雨止まざり太宰治かな
夕さくら書棚に置きしうつせ貝
糸櫻夜の古木に憑かれける

雨村敏子

万里春風ポケットに電子辞書
墨痕の卯波となりし飛白かな
佛頭に春日のまはるしづけさよ
墨一丁八十八夜の空のあり
日は山に水飲んでをる春の鹿



槐市集

大山 里

素通りの土佐は四月の田水かな
花吹雪入るる袋のなかりけり
鳥雲に刺身こんにやく薄みどり
光りつつ揺れつつ葦の芽立ちかな
桜蕊降るふる大地焦げ臭き

加藤富美子

鴨翔つやまた眠りゐる春の沼
春二番鴉斜めにとぼされて
花過ぎの流るとなき運河かな
初つばめ速さに思ひ追いつけず
囀りや胴磨かるる神の馬

金澤明子

満開の桜の中の櫓かな
吉野葛初音の喉ふるへをり
白昼の睡魔来てをり薄ざくら
姑の路を茹でたる吹きこぼし
手作りの筍と路取り替ふる

北嶋美都里

正面に霞し山や大文字
花筏ひねもす池を廻りをり
たんぽぽを古墳に踏んでをりにけり
山菜莢の頭にふれさうな高さかな
葉桜の風となりけり石舞台



槐集

高橋将夫選

蜜蜂の羽音の出入り洞の闇

枚方

近藤きくえ

湯通しの若布めかぶのぬめりかな

熊笹を手折り箸とす花吹雪

宙に舞ふあまたの桃の摘花かな

山路のうす紅の茎摘んでをり

海女の笛天にのぼつてゆきにけり

満開の花よりはなれ弱法師

涅槃図の裏に長椅子置かれあり

薫風や袋にしまふ石の数珠

くちなはの尻尾は草の中にある

たかななの白子掘らるる象頭山

香川

黒田 咲子

飯櫃の旅籠タケノコメバルかな

さ迷ひてのち牡丹の寺のあり

長命寺行きバスに乗る目借時

針塚の蘇鉄の咲いてをりにけり

老櫻の半身すでに如来かな

岡崎

近藤 喜子

春の鹿すつかり靈氣消えてをり

不動明王へろへろと春蚊吐く

花虻の唸り花蕊に響きけり

風光るや筋骨あらはなる馬体

花びらの入りたる部屋にねまりけり

京都

竹中 一花

寺守の熊手の中の散り椿

蛸薬師裏の姉が家花空木

春風の林の中の羅漢かな

春星や猫ぬる家に帰らうか

弘法の文字うすれをり蔦若葉

枚方

谷村 幸子

大寺の芭蕉玉解く絵天井

おぼろ夜やてのひらにある赤珊瑚

行く春の灘の宮水ふふみをり

松蟬やまたも撫でをる句碑の文字

銀河往来 高橋将夫

Ⅱ 俳句の進化 Ⅱ

このごろはハウス栽培のせいもあって、野菜や果物の季節

感が変わったという話をよく聞く。昔からの風習もずいぶん変わった。これらのことは当然ながら俳句における季語の本質に大きく係ってくる。

ところで、昔と変わったことは他にもいろいろある。芭蕉の時代に比べると、先ず情報量が格段に異なる。奥の細道を旅して得る情報は、今や地球規模にまで拡大している。本やテレビやインターネットまで含めれば、宇宙規模にまで拡大する。視覚を例にとれば、江戸の景がニューヨークの景に、天の川がアンドロメダ銀河に変わる。聴覚でいえば、イルカの声まで聞こえてしまう。このことは俳句の素材に大きく係ってくる。

さらに、科学の進歩（遺伝子、脳と心、量子論等）は宇宙観、世界観、人生観への影響を通じて俳句に係ってくる。物を見て、考えて、表現する一連の流れの中で、その基礎となるのが認識であるが、この認識の領域が飛躍的に拡大しているわけである。俳句は「精神の風景」であり、「存在の詩」である。〈存在〉（真理）そのものは認識を超えたところにあるといわれるが、この拡大する認識の範囲はやがては〈存在〉をとらえるかもしれない。そして、「槐」の俳句はすでに、認識を超えた世界にあるといわれる〈存在〉を見据えている。

それにしても、人とは何か、生きるとは何か、この世とは何か、宇宙とは何かは変わることのない永遠の命題。

蜜蜂の羽音の出入り洞の闇 近藤きくえ
闇の中だけに、蜂の羽音による緊迫感たるや尋常のものではな
かろう。見えないから、なおさら怖い。

くちなはの尻尾は草の中にあり 谷口佳世子
「頭かくして尻かくさず」の逆。そういえば、尻尾は蛇にとつ
て弱点といえよう。

さ迷ひてのち牡丹の寺のあり 黒田 咲子
道に迷ったあげく、牡丹の咲く寺に出たという景。だが、「さ
迷ひて」からみて、それだけではなからう。

老櫻の半身すでに如来かな 近藤 喜子
老櫻の中に、すでに阿弥陀如来を見ている。生死はかくありた
いもの。

花びらの入りたる部屋にねまりけり 竹中 一花
一片の花びらが吹かれてきた空間。満開の桜の世界をよそに、
その部屋にねまる。精神の風景。

おぼろ夜やてのひらにある赤珊瑚 谷村 幸子
おぼろ夜だけに、てのひらにある赤珊瑚までがおぼろになりそ
う。虚実皮膜。

(以下略)